

誰も聴いちゃいねえ

平田 圭二

NTT コミュニケーション科学基礎研究所

hirata@brl.ntt.co.jp

あらまし

早いもので、情報処理学会に音楽情報科学研究会 (SIGMUS) が発足して 10 年が経過しました。そこで、これから 10 年の SIGMUS を支える方々に向けて、「誰も聴いちゃいねえ」といういかにも敵を作りそうな題でより良い SIGMUS を作る話題の一端を提供してみたいと思います。

No one listens to it

Keiji Hirata

NTT Communication Science Laboratories

Abstract

It has been 10 years since the Special Interest Group on Music (SIGMUS) was established. Time flies like an arrow. Then, for those who will develop SIGMUS for this coming 10 years, I would like to just provide a starting point for managing SIGMUS better with the title “No one listens to it”, which likely arouses someone’s antipathy.

1 はじめに

早いもので、情報処理学会に音楽情報科学研究会 (SIGMUS) が発足して 10 年が経過しました。まず、これまで SIGMUS を支えて来て下さった多くの方々に敬意と感謝の意を表したいと思います。

今回、私はたまたま SIGMUS の初代主査を務めたという経緯から講演・執筆の依頼を受けました。この貴重な機会を与えて下さったことに感謝しつつ、これから 10 年の SIGMUS を支える方々に、より良い SIGMUS を作る材料のようなものが提供できればと思っています。

恐らく、この文をお読みの皆様それぞれ、これからの SIGMUS に対する熱い想いをお持ちだと思います。是非ともご意見、ご批判等を賜わり、ともに議論し、これからの SIGMUS がより良い方向に発展する一助になればと考えております。

2 実は 19 年間の歩み

音楽情報科学研究会 (SIGMUS) が発足する以前にも表 1 のような歴史がある。(SIGMUS 発足までの足取りは、文献 [1] に詳しい)。

まず、音楽情報科学研究グループ (音情グループ) や SIGMUS の設立目的をその設立趣意書から抜粋する。

音楽情報科学の目的とするところは、計算機で音楽を扱い、それを人間の生活に利用するということ (1989 年 5 月)

音楽情報処理という研究、開発分野自体、まだまだ知名度も低く確立されていると

Table 1: SIGMUS 発足までの足取り

1984 年 7 月	「計算機と音楽」シンポジウム (情処学会、於筑波)
1985 年 5 月	任意団体の音楽情報科学研究会 (音情研, JMACS) 発足
1989 年 8 月	情処の音楽情報科学研究グループ 発足
1993 年 4 月	情処の音情研 (SIGMUS) 発足

は言えないが、情報処理学会の研究会に移行することで本研究分野の存在を内外にアピールし、学問的に社会的に活性化のきっかけになると確信している (1992 年 10 月)

このように、我々は音楽情報処理に関連した学会、研究活動を通じて、人類の技術、社会、文化の発展に貢献することを真剣に考えていた。しかし 19 年前、学会で「音楽と計算機の学際領域の研究を」などと口走るものなら、アブナイ奴、物好き、ヒマ人の烙印を押されるのが関の山という雰囲気であった。多くの IT 系研究者は、とてもそのような分野が研究対象になるとは考えてもいなかった。

ここで、SIGMUS が発足した当時の状況がどうであったのかを少し振り返ってみよう。SIGMUS 設立趣意書から抜粋する。

このように (研究グループの) 会員数が増え会議の規模が大きくなるということは、音楽情報処理の分野に興味を持つ企業、大学が増えてきたことの証であり、研究会を運営するに十分足る母体は存在してい

Table 2: SIGMUS 登録員数の推移

	全登録員数	内 準登録数 *	登録費 (円)
1993	256	54	3,000
1994	220	46	4,500
1995	294	-	3,500
1996	296	-	3,500
1997	296	-	3,885
1998	287	-	3,885
1999	285	-	4,095
2000	303	-	4,095
2001	325	80	3,780
2002	339	82	4,095

* 個人の準登録と団体の準登録の合計。

1995~2000年の準登録数のデータは不明。

ると考えられる。

...

しかし一方で、オーソライズされた確固たる研究組織の必要性も痛感せざるを得ない。現在でも、企業や大学に勤務する会員が業務の一環として研究会に出席できないことが多々ある。

1990年代前半、IT系企業数社が実際に音楽情報処理の研究開発チームを抱えていたものの、音楽情報処理に関する学会発表を行う場合は非常に限定されていた。SIGMUSが発足したことで企業からの発表を多数呼び込むことができたと思う。しかし1990年代後半、世界的な傾向として殆どの大手企業はビジネスに結び付かないという理由で音楽情報処理の研究から撤退してしまった。表2から分かるように、登録員数は全体的には漸増傾向にあるものの、1990年代後半の登録員数の落ちこみは企業の撤退を反映しているようだ。近年は、娯楽に対するニーズの高まり、メディア処理に対する認識の高まりもあり、登録員数は再び増加傾向に転じつつある。

次に、SIGMUSのもう一つの大きな役目は、他領域、他分野の人々(例えば情処学会の他研究会や音楽家、音楽学者等IT系以外の人々)との交流の場を提供することであった。

本研究会のように学際的な研究会を作ること、もともとの情報処理分野以外の会員が増える見込みもあり、貴学会の活性化にもつながると考える。

...

また上述のような幅広い範囲に計算機技術を活かすためには、音楽学関連分野の研究者との緊密な連携が必須である。

表2中、準登録というのは、情処学会の会員にならず研究会にだけ登録する制度であり、SIGMUSでは音楽家、音楽学者等の多くが準登録をしているものと考えられる。準登録の漸増傾向を見ると、他領域、

他分野の人々との交流の場を提供することにもある程度成功したと言えるだろう。

交流の場ということに関して、設立趣意書では特にコンサートについて言及している。

特に音楽情報処理の研究は常に実証的でないといけないと考える。即ち、ある音楽システムや音楽作品を支える音楽情報処理の技術は、具体的に音/音楽の形になって初めて人間に対して意味を持つ。従って、本研究会ではシステムの実演や音楽作品を発表するコンサートも、論文発表と同じく重要な技術的意味を持つと考える。

設立趣意書では年1回のコンサート開催を計画している。この10年間の開催実績は、夏のシンポジウム等でのコンサートに加え、インターカレッジコンサートが継続的に実施されており、開催回数において目標は十分に達成されていると思われる。

ここでは詳述しないが、海外でも同様に音楽情報処理に関連した新しい国際会議が始まったり、ビジネス用途を目指した音楽情報検索の国際研究プロジェクトも走り始めている[3]。海外でもやはり、音楽情報処理への注目が近年とみに高まっているように見受けられる。

このように一見、順風満帆のように感じられるが、筆者同様、次のようなモヤモヤを感じている方も多いのではないだろうか(これ以外にも小さなモヤモヤはある)。

モヤモヤ(1) この10年間で、登録員の平均年齢あるいは幹事会の平均年齢が10歳増えているのではないか。
つまり、若い研究者は育っているのか。音楽情報処理が若い研究者にとって魅力的な分野に映っているのか。

モヤモヤ(2) 日本の音楽情報処理の研究に割り振られる研究費は増えているのだろうか。
個人ベースでは競争的研究資金を獲得している方は居るものの、企業や大学でプロジェクトとして音楽情報処理に取り組んでいる所はない。

モヤモヤ(3) 他の研究会と比較して、300名の登録員数に見合った活動をしているのか。研究会開催回数や発表件数は十分あるものの、小規模シンポジウムや国際会議を主催した実績はゼロである(論文誌特集号は1.5回)。

モヤモヤ(4) 音楽情報処理にはブームがあったのだろうか。
普通10年間もあれば、流行って廃れたテーマが1つや2つはあるものだが、SIGMUSではそのように大きく盛り上がったテーマは無かったように思う。

モヤモヤ(5) 音楽家は研究発表会を、研究者はコンサートを楽しんでいるのだろうか。

近年、コンサートに興味を持ってない研究者や研究発表に興味を持ってない音楽家が問題視(?)されるようになった。ただし、本当にそういう人々が増えているのか、それとも単に顕在化しただけなのかはまだ良くわかっていない。

3 誰が喋って誰が聴いている？

一体、上のモヤモヤの正体は何だろうか。

およそ学会での研究活動というのは、情報(知識や意見)とリソース(研究資金と人材)が、人と人、組織と組織の間を循環し蓄積されていくことであると思う。この時、情報とリソースは車の両輪であり、一方で欠いてしまうと研究活動はうまく成り立たないと考える。上のモヤモヤは、SIGMUSに関連している人や組織の間で、情報とリソースのやりとりが活発に生じていないため、これらの人や組織の間でお互い関わり合うことがメリットになると思えないのであろう。

筆者は、上の各モヤモヤが、次のような人や組織の間でのやりとりがうまく行っていないことから生じているように感じている。

- (1) 若手とシニア
- (2) (大学)研究者と企業あるいは国(の競争的研究資金)
- (3) SIGMUS 内のプロ研究者、マニア、アマチュア
- (4) SIGMUS と他分野の研究会や学会
- (5) 研究者と音楽家(演奏家、作曲家等)

(1): 双方が様々な場面で送り手と受け手になり得る訳だが、一般的な傾向として、情報やリソースを受け取る側が活発でないように感じられる。

(2): 企業も大学も、音楽情報処理の将来ビジョンを各自なりに明確に描いて、それに向けて戦略的に情報を提供・発信し、リソースを獲得するという活動をしているのだろうか。

(3): SIGMUS では活発な研究者の絶対数がそれほど多くなく、組織力が欠けているように思える。これは、音楽という対象を扱っているために、理工学と音楽学のプロ研究者、マニア、アマチュアの区別が付きにくいからではないかと感じる(何をもってこれらを区別するかもまた難しい問題だが)。

(4): 新しいアイデアの源泉の1つは、異なる考え方と有意義な情報交換をすることである。SIGMUS は、発足当初から主に音楽学、音楽認知科学、音楽心理学等の音楽系分野に目を向けていたが、それだけではなく、情報処理学会の他研究会(AI, HI, 音声/言語、インターネット、モバイル等)にももっと目を向けるべきだろう。そして、これら他分野と情報交換する時に問題になるのが SIGMUS のアイデンティティである。SIGMUS が目指す音楽情報処理という研究分野は、情報交換する他分野とどう違いどころが特色な

のだろう。SIGMUS の研究発表は、他分野の人々にとって魅力的に聴こえているのだろうか。

(5): 多くを語らずとも分かって頂けると思うが、コンサートで楽曲を聴いて技術的な優劣が判断できることは少なく、また演奏家や作曲家等と研究者の共著論文も少ない。

以上全体は筆者の感想であるが、乱暴な言い方をすれば、誰が喋って誰が聴いているんだ? 誰も聴いちゃいねえ、である。

4 ある提言

ではどうすれば良いのか。

音楽情報処理と似たような状況にある(?)ジャズという音楽を取りまくジャズ評論家、レコード会社、ジャズファンを痛烈に批判した中山康樹氏の著書[2]を参考にしてみよう。その『あとがき』より一部抜粋する。

ジャズは「ほんとうは」すばらしい音楽である。そしてその「すばらしいジャズ」の時代はとうに終わっている。だが、それは悲しむべきことでも懐しむべきことでもない。…昨今のジャズ業界の「いびつさ」は、終わったものをさも終わっていないかのように取り繕うとするあまりの自己矛盾と無理からきている。

そのようなジャズを取りまく状況に対する中山氏の改造案の中から幾つか抜粋する。

- ジャズ評論家はつまらないことを書くな。
- ジャズ評論家はジャズ専門誌から自立せよ。
- ジャズ評論家はジャズというジャンルが崩壊した現状を把握すべし。
- レコード会社の洋楽部の仕事が洋楽 CD の手を替え品を替えの日本版再発だけだとすれば、洋楽部を廃止せよ。その代わりに、多くの多彩な CD を輸入するために輸入部を強化せよ。
- レコード会社を 1 社に統合せよ。
- 必要以上に卑屈になって「明日のジャズファン」に媚を売るより、常連客であるところの「今日のジャズマニア」を大切に。
- ジャズ雑誌は原点に帰り、読ませる読み物で勝負せよ。
- ジャズファンよ、英語を勉強しよう

筆者は、ひとり勝手に耳が痛くなっている。

5 まとめに代えて

音楽情報処理は音楽と理工学の学際的研究分野である。異分野の人々がコラボレーションした時、1+1 が 3 にも 4 にもなる場合もあれば、1+1 が 0.5 や 0.1

になってしまう場合もある(掛け算仮説¹に従えば, $1 + 1$ ではなく 1×1 である)。これはひとえに, 情報とリソースのやりとりが活発に生じているかどうかにかかっている。筆者の講演の後, SIGMUS 有識者の方々によるパネル討論会「聴いていますよ。僕にも言わせて下さいな」が続くことになっている。是非, 未来のSIGMUSに対する各パネリストの熱い想いを拝聴し, 有意義な議論に結び付けたいと思う。

以上, いろいろと僭越で失礼なことを書き連ねてしまいました。気分を害された方がいらっしゃったら深くお詫びしたいと思います。ただ, ひとつご理解頂きたいのは, 筆者は音楽情報処理の大きな可能性を信じている者であり, 今後のさらなる発展を願っているということでもあります。この点においては, 皆様と全く同じ気持ちではないかと思えます。拙文に対し, ご意見ご批判等を賜われれば幸甚です。

謝辞: 音楽情報科学研究会に関する資料収集について, 情報処理学会事務局 渡辺美也子氏に大変お世話になりました。

参考文献

- [1] 坪井, 野瀬, 鈴木, 松島, 高田, 中澤, 音楽情報科学研究会全記録 (1993). あるいは <http://karas.chiba-pc.ac.jp/tsuboi/JMACS-reikai.html> を参照。入手方法は野瀬隆氏 (東京農工大学, nose@cs.tuat.ac.jp) までお問合せ下さい。
- [2] 中山康樹, ジャズを聴くバカ, 聴かぬバカ, KKベストセラーズ (2002).
- [3] 平田圭二, 昨今の音楽情報処理における研究プロジェクトについて, (財) 日本情報処理開発協会 AITEC 人間主体の知的情報技術調査 WG 平成 14 年度報告書 (2003).

¹分野 A と分野 B の学際領域の研究で生み出される研究成果の量についての仮説。ある 1 人の研究者について, 分野 A で P_A , 分野 B で P_B の仕事量が期待できるなら, A と B の学際領域では $P_A + P_B$ ではなく $P_A \times P_B$ の仕事量が期待できる。